

読書会がずっと 続いて欲しい

高退協読書会の報告 (高退協学習会より)

小島真子



この会の発起人は坪井幹之先生(以下は「さん」を敬称に)である。坪井さんは1989年に退職した後、高退協に入って「高退協会員として何かできる事はないか?」と考えた末、「自分はこれから山に登りたい。本も読みたい。山の会と読書会なら自分

にも出来る」と思っ呼びかけた。初回の参加者は、浜田昌俊さん・中田四一さん・坪井さんの3名。二回目は崎山さん・田所さん・坪井さん、三回目からは何と三十年間出席し続けた浜田隆史さんが入会した。浜田さんは最後の入院をした時、御家族に「読書会の課題本を買ってきて、病院の中で読む」と言ったそうである。記録によると初期のメンバーは渋谷さん・梅原さん・上田さん・佐伯さん・島本さん・田所さん等々多士済済な方である。

一年に六回、こつこつと継続してきた読書会に、私が入ったのは67回目(2002年)からだ。それから百回以上参加している。「退職したら外国に住んでみよう」とニュージーランドやイギリスの高校で日本語を教えていたのだが、帰ってから山の会に入会した。私にとって山の会での最初の海外旅行は2001年の「アメリカ国立公園を巡る旅」だった。ところが出発直前にアメリカ同時多発テロが起り、参加者が半分以上減った。

気の強い私は「今が一番安全な時!」と参加し、少数ながら旅行したのだが、その中で浜田昌俊さんから「ねえ小島さん、読書会に女性の意見が欲しい。是非入ってほしい」と言われた。「えーっ、私が?女らしくはないけどな」と思ったけれど入ることにした。

ところが今度は「女性どうしなら言いやすい。高退協の女性をもっと誘ってや」と言われ、一生懸命女性会員に声をかけたが誰も入ってくれない。たぶんメンバーの名前を聞いただけで、恐れをなしたのではないかと思う。仕方なく外部から3人くらい女性をスカウトしたけれど長くは続かなかった。それでも2年前に叶岡さんが参加してくれようやく女一人になった。

現在は樋口勇雄さん・高橋泰宏さんが中心になって運営している。樋口さんは案内係を長年引き受け、今回はどんな話だったか、次回は何を課題本にするか、などを葉書に印刷して会員に送ってくれているし、高橋さんは今年か

ら会計を引き受けてくれた。最近3人も会員が増えた。

一番目は高退協事務局にいる大川法由記さん。大川さんは読書会の取材に来て、「入ってよ」と捕まっって会員になってくれた。次は県立大名基督教員青木晴男さん。青木さんは私が社会人枠を利用して英文学を習った年下の恩師である。この間から高退協の井上圭介さんも入ってくれ、若手が増えて喜んでいる。

今日の報告会の資料として30年間に読んだ本を一覧表にしてみた。しかし堅苦しい本が多くてかえって逆効果かなとも思う。でも気心の分かった仲間同士で話すから、言いやすいかなと思うので本を読むことが好きな人はぜひ入ってください。

坪井さんは昨年亡くなったけれど、「高教組でいっしょに闘った絆を大切に保ちたい」としじみ語った声も今も心よみがえってくる。今日ここに来る前に次の課題本を買って来た。山口二郎の「民主主義は終わるのか」という本で



第173回 (2019年8月22日) 読書会
向かって左から 小島真子さん、叶岡淑子さん、
故 浜田隆史さん、高橋泰宏さん、樋口勇雄さん

私達の故郷が、企業の 利益追求の標的に!

四万十市在住
川村喜美



メガソーラー建設中止も
束の間、今度は大規模風力
発電計画が!

(四万十川流域へのメガソーラー建設中止)
昨年、四万十川流域への大規模太陽光発電(メガソーラー)の設置反対の記事を記載させていたとき、四万十市議会で10対9の僅差でしたが、「建設反対の陳情書」が採択されたことをお知らせいたしました。その後、市長も四万十川景観条例に基づき、建設を不許可としました。地域住民を始め、みなさんの努力、ご協力に感謝いたします。

(新たに、大規模風力発電計画が!)
「日本最後の清流四万十川

を何とか守ることができた!」と思うのも束の間、今度は日本最大級の風力発電が四万十町と四万十市の山境に49基も大企業オリックス社が計画しています。風車の高さは120m、直径は82mです。一基建設のために山頂に50mX50mの平地が必要であり、これが49基分も。その山裾には四万十川や後川が流れていますが、また、今回の風力発電が一番近い民家は500m、2km圏内に315戸、4km圏内には四万十市・四万十町ともに保育園、小学校、中学校、診療所があり、四万十町には高校、老人施設も入っています。

(自然エネルギーなら心配ないのでは?)
原発ではなく、自然エネルギーならよいのでは?と思いがちですが、風車の高さは開発当初は35mであったものが、この事業計画では120mと巨大化し、建設数もこれまでよりも大幅に増加する中で、大規模化に伴ういろいろな問題が各地で起きています。しかも、今回は国内でも最大規模です。

(健康被害、土砂流出、環境破壊、生態動物への影響、健康被害として、睡眠障害、や振動によって、高血圧、免疫低下等

様々な体調不良が心配されます。他の地域では、症状の改善の目処がないために、自分の故郷を軽蔑せざるを得ない人も出てきています。これらの症状を「風車病」と言っていますが、環境省は因果関係を認めず、医学的な認定がされず、苦しんでいる人が多数です。また、四万十川への土砂流出、土砂流出が心配されます。洪水時の濁流に拍車をかけるうえに、水位の上昇にもつながり、治水の面にも反します。山々を乱開発することで、四万十川の景観が変化したり、川の恵みである鮎やエビ、アオノリにも影響を及ぼしたりすることが考えられます。高知県の天然記念物であり、絶滅が危惧されているヤイロチョウへの影響も指摘されています。

原内になぜ多くの計画が出されているのでしょうか?
四国内では電力が十分足りており、現在でも発電の30%以上は四国外に販売しているのに、私達の大切な故郷である山や川を乱開発してまで、しかも健康被害の予想されることをなぜ、引き受けなければならないのでしょうか。四万十町だけでなく、三原村と

今後は電力供給の在り方は、原発に依存しない、自然再生エネルギーの必要性については私自身も認識しています

土佐清水市の境の今の山に高さ17mが46基、橋原町と愛媛県西予市の県境に50基。香美市と本山町の境の国見山に22基と多くの計画が出されています。なぜ、こんなに多くの計画が出てきているのでしょうか。
大規模発電に関して、フィット(FIT)固定買取価格制度)の買い取り価格が安くなる、もしくはなくなるが、予測される中で、駆け込み的に進められています。世界的には風力発電が洋上に設置されていますが、洋上については建設のコストが高、企業利益の面から陸地のほうが安上がりであり、企業利益追求のために四国内が標的になっています。

しかも、今回の四万十市の場合の事業主であり、オリックス社は、経済産業省・資源エネルギー庁の総合資源エネルギー調査会の基本問題検討委員であり、調達価格等算定委員会の委員長となっています。この当事者の企業自体が、関係する委員会の委員であり、委員長であることは公平性の面で問題が生じるのではと危惧します。

四万十町ではエタインの人たちを中心に住民が奮起し、「心の原風景に巨大風車はいらない!」と大規模風力発電建設に反対するネット署名を呼び掛け、豊かな自然の中での子育てを求めて活動しています。企業は2026年の運用開始をめざして、環境影響評価方法書を提出し、現在、環境アセスメントが進行しています。しかし、このような動きをまたまた四万十市民の多くは知らない状況です。心配される四万十川の汚染、環境破壊、健康被害等はすぐに解消されるものではなく、長年に渡って継続されます。私達の大切な故郷の山々、四万十川、日本の原風景は私達で守らなくてはなりません。県内各地の風力発電計画についても同様に、将来に禍根を残さないように、多くの住民に考えてほしいと思います。

が、それが極端に巨大化した風力発電では、問題が多すぎます。しかも、四国の電力は足りています。今後の電力供給の在り方としては、自宅や事業所での発電を活用する「分散・自家消費型」、各地域で自立した供給体制作りが推奨されています。